



濱田 仁：和布刈神事（めかりしんじ）

はじめに

古来、日本では海藻は食用であった。我々をとりまく自然と祖先を崇拝した我々の先祖は、我々が食べる海藻は神様も食べられるし、清浄であると信じた。その中で、ワカメは万物に先んじて旧暦正月には芽を出して成長し、自然に繁茂するので幸福を招くとされ、神聖視された。縁起物で、新年の予祝行事として重んじられ、神前に捧げてその年の無病息災、海上安全を祈る神事に用いられた。それが和布刈神事で、山陰から福岡県北部のいくつかの古社で行われたようだが、いずれも1600年以上続く日御碕神社（島根県出雲市）、住吉神社（山口県下関市）、和布刈神社（福岡県北九州市）では今日でも続いている。私は、これらの和布刈神事を現地を訪れ、参加し見学した（図1）。

ここではこれらを紹介し、比較し、古代日本人の宗教観、自然観、ワカメ食文化と、その歴史的意味について考えてみたい。



図1 和布刈神事の行われる日御碕神社、住吉神社と和布刈神社の位置。



図2 日御碕神社周辺。

1. 出雲国・日御碕（ひのみさき）神社の和布刈神事

神社の由緒と祭神

日御碕神社へは、松江から一畑電鉄で約1時間、終点の出雲大社前で降り、バスに乗り換え北西へ数km、古事記で有名な高天原（たかまがはら）を越えるともうすぐである（図2）。陸路が不便で、つい30年ほど前までは小泉八雲（1891）のように、出雲大社近くの稲佐（いなさ）の濱から日御碕神社まで舟を使った。神社近くには1903年に建立された日本一の高さ（43m余）を誇る出雲日御碕灯台がある。

宮司は神代以来代々小野家で、現宮司、小野高慶氏は98代目。1代25年とすると、2450年前に神社が創立された事になる。天平7年(735年)聖武天皇勅書に、伊勢神宮は日出所宮（ひいずるところのみや）で日の本の昼を守り、日御碕神社は日沈宮（ひしずむのみや）で日の本の夜を守るとあり、中央の尊敬を集めた。現社殿（図3）は徳川家光の命により建てられ、重要文化財である。このように辺鄙な田舎に竜宮城のように立派な、格式のとても高い古い神社があるのは驚きだが、昔は海上交通が大きな役割を占め、波風が穏やかで水深のある奥まった湾が天然の良港で文化伝搬の基地であった。祭神は、正面奥の日沈宮に天照大御神（あまてらすおおみかみ）。手前右上方の神の宮（かむのみや、上の宮）には古事記に新羅に行ったとある素戔鳴尊（すさのおのみこと）を祀る。奥には素戔鳴尊の墓、隠ヶ丘があり、全国の素戔鳴尊を祀る神社の総本社である。摂社に韓国（からくに）神社があり、素戔鳴尊と五十猛尊（いそたけのみこと）父子を祀る。末社の熊野神社に、伊弉冉尊（いざなみのみこと）、事解男尊（ことさかおのみこと）、速玉男尊（はやたまおのみこと）を祀る。

神事の起源と内容

社伝によると、13代成務天皇6年（西暦150年頃、古代の年代は丁度200年ずれるので、実際には西暦350年頃）正月5日早朝、1羽の鵜（かもめ）が未だ潮の滴る海藻を口にくわえて来て神社の欄干に掛けて飛び去ること三度、これを見た社人は不思議として直ちに浄水で洗い神前に供えた。この海藻が和布（め、ワカメ）で、和布刈神事の起源である。出雲地方ではこの日からワカメ漁が解禁になる。

2002年旧暦正月5日、新暦2月16日土曜日、私は神社の許可を得てこの神事を見せて頂いた。神事に先立ち、朝10時から日沈宮（下の宮）で男性数人、女性一人の神職による神事が行われた。まず、米、酒、塩、水、魚（ブリ）、野菜、果物の常饌（じょうせん、神様の日常の食べ物）と、新ワカメを三宝に載せて男性神職数人が順次神前に運んで供える。昔は、キジなども供えられたそう。次いで、小野宮司が祝詞をあげる。



図3-6 日御碕神社。3. 日御碕神社全景。右は門、中央は拝殿、左奥は日沈宮（ひしずむのみや）。隠れているが、門の右上方に神の宮がある。4. 和布刈の行われる権現島と舟橋の和布刈神事当日の様子。5. 神職の渡島を助ける為に権現島で待つ裸役。四人の神職は船に座って渡島を待つ。6. 熊野神社で祝詞を上げた後、島の出入口、一の鳥居前で行う和布刈（めかり）。

意味は、「そのお名前を申すのさえ恐れ多い天照大神と、同じ本殿に住まわれる五人の男神に、宮司小野高慶が恐縮して申し上げる。昔、今月の今日、沖のカモメがワカメをくわえ来て、それを神様にお供えした故事により、今日ワカメをお供えしますので召し上がって下さい。こうしてご奉仕しますので、これからも天皇の御代を末永く祝い、氏子や崇敬者をも桑の枝の如く榮えさせ、奉仕させて下さい、と恐縮して申し上げます」である。この間、時折、男性神職が笛・鉦（かね）・鈴を、女性神職が直径約1mの大太鼓を鳴らし、波の音を模した楽を奏し、祝詞が終わると再び男性神職が常饌を順次下げた。その後、素戔鳴尊を祀る神の宮でも、同様の神事が行われた。

午後2時、小野宮司を先頭に4人の男性神職が本社から約1km離れた宇竜（うりゅう）港に着く。港の先の権現島（図4）は周囲約500m、標高約30m。島の頂上には日御碕神社末社で、伊弉冉尊（いざなみのみこと）を祀った熊野神社がある。港には、1年12ヶ月に因み、クジに当たった12人の船頭が自分の漁船を汀に漕ぎよせ、港と権現島の上に2本の綱を張り、その間に12隻の船を横に並べて舟橋を作り、日章旗や大漁旗で飾り、斎竹を立てる。神職達が渡島の際は、裸役という数名の若者が寒空に赤い下帯一つとなり、上船用の板橋を支え、神職達の乗船を助ける。この舟橋に神職4人、地区長、氏子代表など約25人が次々と乗り、最後に私が、残る数百人の見物人に悪いな、と思いつつ乗った。権現島は、つい数年前まで女人禁制で、

女性記者でも、島に渡るのはおろか船橋に乗ることさえ出来なかった。島に渡る人皆が船に乗り終わり、対岸の権現島に最も近い沖一番の船に神職4人が移動して着座すると、船頭が美声で朗々と船歌を唄う中、各漁船の両端を繋いだ2本の綱を引き寄せ、濱から約50mの権現島にスルスルと船橋を移動して着けた。この際、裸役が神職達が島に上がるのを助ける（図5）。

権現島に着いて一の鳥居に拝礼し、すぐ山道を登ると、2～3分で山頂の熊野神社に着く。熊野神社では、奏楽の内に常饌と今年の新ワカメを供え、12隻の奉仕船に授けられる大漁と海上安全の御神札を献じ、宮司と禰宜（ねぎ）が大漁祈願の祝詞をあげる。町長・氏子代表・大船頭代表等が次々に玉串を捧げて拝礼の後、島を下る。神職達が一の鳥居前に降りて来て、地元の人多数が見守る中、禰宜がワカメを刈り、他の神職の持つ三宝に載せる（図6）。その後、裸役が神職達の乗船を助ける。神職達が宇竜港に最も近い灘一番の船に戻って着座すると、船歌の中、綱を引き寄せ船を宇竜港に着ける。その間に裸役は、権現島から海に飛び込み、港に先に泳ぎ着き、神職の上陸を助ける。裸役は女性に人気が高いが、これは古来日御碕では男の海人に依る潜水漁が盛んだった事（出雲國風土記、733）を示している。この和布刈神事が終わると、出雲も次第に春に向かう。

和布刈場と日御碕漁業の歴史

禰宜の高木玄明氏に依れば、400年前の和布刈神事の絵馬

には、日御碕神社対岸の経島（ふみしま、図2）との間に船橋が掛かっている光景が描かれている（高木 1991）。従って、昔の和布刈神事は経島で行われていたことが分かる。しかし、旧暦正月は大荒れの季節なので、上記のように、権現島の熊野神社で行うようになった。宇竜港付近は、沖に浮かぶ小さな島々が防波堤となって波穏やであり、水深のある磯で、北前船の風待ち港として賑わい、遊郭もあって栄えた。出雲國風土記には、宇礼保浦（うれほうら、宇竜港の事）幅七十八歩あり。船二十ばかり泊まつべし。すべて北海（日本海）の産物は、隣の楯縫（たてぬい）郡同様である。但しアワビは出雲郡が最も優れ、(日)御碕の海人（あま）是を捕る、とある。今日ではアワビが採れなくなったのだがサザエが名物で、その餌となる、アラメ、カジメ、ワカメなどが豊富で、出雲國風土記の記述を裏付けている。

2. 長門國一宮・住吉神社の和布刈神事

住吉神社

住吉神社はJR新幹線の新下関駅から南東へ約1km、徒歩約20分（図7）。一の宮のバス停から山側へつま先上がりに歩くと、左手に境内の池が見えてきて美しい。和布刈神事が行われる関門海峡の壇の浦からだど、真北に直線距離で4km弱。バスに乗り、山の麓をぐるっと回ると約20分、山の反対側の一の宮のバス停で下車する。朝早く行くと、数名の神職が広い境内を揃って掃除していて清々しい。

境内中央には小さいが洒落た太鼓橋があり、奥の階段を三十数段登ると明るく開けて、古い建物が並ぶ。正面手前に毛利元就が1539年に寄進した重要文化財拜殿。奥には大内弘世が1370年に再建した、長屋のように横に五棟連なる国宝本殿（図8）が建つ。向かって左から、西第一殿に住吉大神（表筒男命（うわつつのおのみこと）、中筒男命、底筒男命の三神）、西第二殿に応神天皇、中第三殿に武内宿禰（たけのうちのすくね）命、東第四殿に神功（じんぐう）皇后、東第五殿に住御名方（たけみなかた）命を祀る。

本殿右奥には80種以上の貴重な植物が生えた原生林が鬱蒼と茂る。特に楠は武内宿禰命お手植えと伝わる。古株から新根が生え、根廻は60mにも及ぶそうで、植物学的にも貴重な森である。

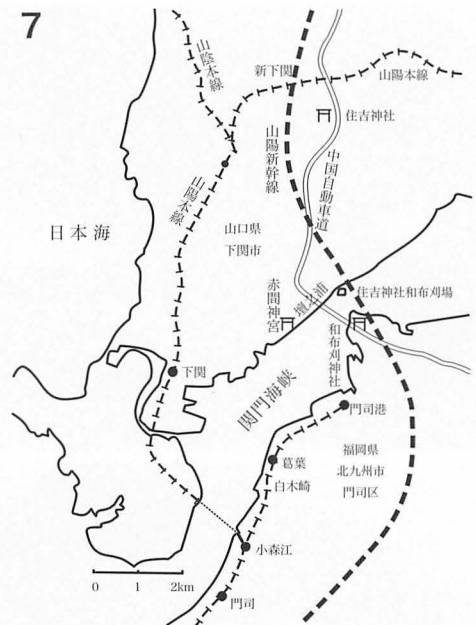


図7 関門海峡を挟んだ住吉神社と和布刈神社の周辺図

和布刈神事の由来

記紀や社伝に依ると、第14代仲哀（ちゅうあい）天皇は、九州で勢力の強い熊襲（くまそ）征伐の前に、熊襲と通じていた新羅をまず攻めよという神のお告げを聞かず、神罰が当たり西暦200年（史的には西暦400年）2月6日に亡くなった。幼児から聡明で美しく、この時第15代応仁天皇を懐妊中だった神功（じんぐう）皇后は、同年9月10日、出産は帰国してからにして欲しいと、腰に石を挟んで祈願し、新羅に遠征した。新羅に着くと大津波が起り、新羅王は恐れて降伏した。皇后は勝利を納め無事帰国。12月14日に応仁天皇を筑紫の宇美（うみ、元は産）八幡神社で出産。穴門山田邑（あなとやまだむら、現在の下関市一宮）に住吉神社を創建し、神主踐立（かぬしほむたち）に命じて早朝瀬戸（はやとものせと、関門海峡）のワカメを元旦未明に刈り採らせ（図9）、自ら神事を執り行い、ワカメを神前に捧げた。これが住吉神社と門司の和布刈神社の和布刈神事の由来で、1600年以上続く。



図8, 9 住吉神社。 8. 住吉神社の本殿（奥）と拜殿（手前左）。

9. 住吉神社の和布刈神事古図（住吉神社の資料に依る）。

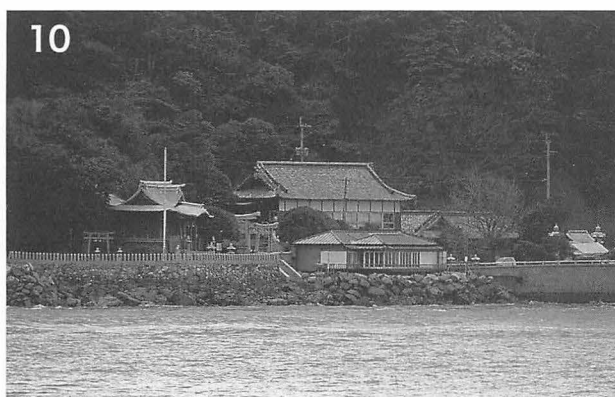


図 10, 11 和布刈神社。10. 関門海峡を挟んだ対岸の壇ノ浦から見た和布刈神社全景。中央石段下の灯籠付近が和布刈の場所。
11. 和布刈神社の和布刈の図（和布刈神社境内の案内説明図に依る）。

因みに摂津國（大阪市）の住吉大社の住吉大神は和魂（にきみたま）と言い、船の方向を決め、にきめ、と言われたワカメが依代（神様のとりつく所）。一方、長門國一宮・住吉神社の住吉大神は荒魂（あらみたま）と呼び、船の操縦を決め、アラメが依代である。

神事の内容

神事は旧暦大晦日（旧暦では、1日の始まりは日の出だったので、初日の出とともに1月1日になった）午前1時、拝殿で神職数名が和布刈の無事を祈願する祝詞（のりと）を詠んで始まる。次いで瀬直が燧（ひきり）で火を起こして提灯に移し、更に境内で松明に火を移す。2時過ぎ、衣冠束帯姿の神職3名と、地下足袋に藁草履をはき、予備の草履を腰にぶら下げ、法被を着た供奉員（ぐぶいん）十数名が松明の火を燃やし継ぎ、山間の和布刈道を1時間以上歩き壇ノ浦に向かう。旧暦1日は月がない。往復4時間近い照明は松明1本を燃やし継ぐ。供奉員各自が1本づつ用意する松明は、枯竹を4つに割り、直径20～30cm、長さ3～4mに束ね、竹の中には近くの山で掘り起こした100年を超えるクロマツの切り株、肥松を鉛筆の様に細く切って忍ばせたものである。肥松は多量の松脂を含み、竹に混ぜると火が消えず長持ちする。

午前2時半頃、壇ノ浦に着く。干潮で露出した海濱火立岩（うみはまはたていわ、長さ3、幅2、高さ1.5m程の岩）の前で、火を焚き暖と明りを取り、全参加者十数人が餅を焼いて食べる。海濱火立岩に土器（かわらけ）を数枚置き、その上に米、餅、酒を備え、海に向かって宮司が祝詞を上げ、和布刈の安全、航海の安全、豊漁などを祈願する。

午前3時過ぎ、約780m離れた対岸の門司の和布刈神社とほぼ同時刻に和布刈が始まり、和布刈神社の火も僅かに見える。太陽・月・地球が一直線に並ぶ旧暦正月1日は新月で、和布刈の行われる午前3時頃は、1年最大の干潮となる。潮流は早いのが、漸深帯に生えるワカメ刈りに最も適した時間である。和布刈供奉員十数人は、松明の明かりを頼りに約30分、多量のワカメと少量のアラメを刈り採り、シュロ縄で編んだ和布入れ籠に入れて復路に着く。

余談だが、上記のとおり、住吉神社の和布刈神事は今でも一般の人は神事を見てはならず、もし見ると目がつぶれると言い

伝えられ、当夜は街道筋の家は堅く雨戸を立てて見ない。宮司さん御自身も赤間神宮（図7）に居られた時は、目の前で神事があったのに見た事がなかったようだ。ところが、供奉員の一人が海峡の深い所迄ワカメを探しに行ったところ、海上保安庁の人がどこかで監視していて、関門海峡中に響きわたるような大型スピーカーで、「危険なので浅瀬に戻りなさい」と注意したのは驚いた。目は大丈夫だっただろうか？今も気にかかる。

昔はこの神事が済む迄は、ワカメを刈れなかった。現在では、昔の山道も国道や県道、高速道路などが出来、交通量が激しくなっていて危険で、車で移動している。しかし、壇ノ浦に着くと、昔通りの神事が行われる。どんなに荒天の夜でも、神事の時だけは穏やかになると伝承されるが、実際、私が参加した時、珍しく吹雪であったのに、壇ノ浦に着いて神事を行って居る時だけ風雪が止んだのは不思議に思う。

献備祭（けんびさい）

神社に戻り、拝殿前で宮司以下和布刈参加者全員が拝礼し、和布刈の無事を報告、住吉大神に感謝する。その後、参加者は社務所奥の座敷に集まり食事（直会）をする。

午前6時頃から神職6人全員と氏子数人が参加し、拝殿と本殿で献備祭が厳かに行われ、ここからは公開される。笛や太鼓が鳴り、宮司らが祝詞をあげ、刈り採ったワカメとアラメの他、昆布、大根、ゴボウ等の神饌を、生の梅の小枝を箸とし、本殿第一殿の住吉大神に供える。夜が明ける午前7時前に献備祭は終わる。

ワカメは献備祭の後、近隣の氏子達が旧正月の雑煮や味噌汁に入れて食べるが、アラメは食べない。また社務所の前では氏子の婦人部の人達が参詣者に甘酒を用意し、また農具、植木などの市も立ち、旧正月を祝う参詣者で終日賑わう。

3. 豊前（ぶぜん）・和布刈（めかり）神社の和布刈神事

和布刈神社の和布刈神事と神事公開のいきさつ

和布刈神社（図10）は、関門海峡を挟んで壇ノ浦の対岸、北九州市門司区にある（図7）。住吉神社同様、西暦400年、神功皇后創建と伝わり、関門海峡に接して境内が広がる。祭神は比売大神（ひめのおおみかみ、天照大神）、日子穂々出見神（ひこほほでみのかみ、神武天皇の祖父）、鶴草葺不合神（う

がやぶきあえずのかみ、神武天皇の父)、豊玉比売神(とよたまひめのかみ、鶺草葺不合神の母)、安曇磯良神(あずみいそらのかみ、海事を司る神)の五柱。

明治以後、和布刈神社の社格は県社で、国から宮司が派遣されず、豊前小倉藩家臣高瀬家が従前どおり宮司を勤めた為、社伝や古文書が多く残る。醍醐天皇皇子重明親王の日記「李部王記」に「元明天皇和銅3年(710)豊前國隼人神主和布刈御神事の和布を奉る」とあり、神事が少なくとも1300年以上前に行われていた事が確実である。

神事は、冬至の和布(め)繁茂の祈念祭で始まる。旧暦12月1日には、予備を含め松明を2本作る。神職は神事の一週間前から別火(べっか)に入り(家族とかまどを別にすること)、潔斎する。旧暦元日午前零時頃、拝殿前でホダ木を焚き、拝殿内で横笛、太鼓、擦鉦(すりかね)で雅楽を奏で、祝詞をあげ、豊前神楽を舞う。神饌として、健康祈願の為に、力の飯(いい、固く握ったご飯)、福噌(ふくぞう、味噌と大根を炊いたもの)と歯固(はがため、5cm角の大根を15個に切った物)を、また、三種の神器を意味する鏡餅(鏡)、菱(剣)、なまこ(曲玉)をウラジロとユズリハを敷いた三宝の上に載せ神前に供える。この神社では、熟饌(じゅくせん)といい、煮炊きをして暖かな神饌をお供えすることが特徴である。

午前3時頃、三人の神職が和布刈を行う。一人が約3mの松明にホダの火を付け足下を照らし、宮司が鎌でワカメを刈り、他が刈り採ったワカメを手桶に入れる(図11)。関門海峡は流れが速く早瀬(はやとも)の瀬戸と言うが、約1時間、全身ずぶぬれでワカメを刈り、元朝(としのはじめ)の神供とし、天皇家、小倉藩主小笠原家や近隣諸侯にワカメを献上した。摂津守や毛利元就からの受取書も見せて頂いた。

住吉神社同様、和布刈神社の和布刈神事も以前は秘事であった。神事公開の契機は、太平洋戦争で兵士が武運長久を祈願し、ここから出港したが、戦争に負けた。戦後、神社は役に立たない、日本の伝統は駄目だと言われた。そこで、日本は戦争に負けたが、貴重な伝統文化がある事を知って貰おうと、昭和21(1946)年に公開したそうだ。

和布刈神事の意味

ワカメは、日本各地、朝鮮半島南岸と東岸、中国旧満州南部、ロシア沿海州などに産する極東の海藻である。古代、朝鮮・北九州・北陸地方は環日本海文化圏を形成し、ワカメ食はこれらの地方に共通する古い文化である。万物に先立ち清浄な正月の海に生れ、大きく繁茂するので一年の幸福を招くとされ、縁起物であった。このワカメを正月に神前に供えて豊漁と航海の安全を祈り、お下がりを食べて身を浄め、ワカメ漁解禁の日とすることは、三社の和布刈神事に共通する。しかし、三社の和布刈神事は異なる点も多く、日御崎神社と和布刈神社では神職がワカメを刈る。住吉神社でも古図(図9)にあるように、昔は神職が刈ったようだが、今は和布刈供奉員がワカメを刈っている。

日御崎神社では、旧暦正月5日の昼に神事が行われ、地域

住民も参加する。ここには朝鮮と関係の深い素戔鳴尊の墓があり、境内には韓国神社もある。神事開始期、古代朝鮮の新羅、加羅との関係が良かったと思われる。

一方、住吉神社と和布刈神社の和布刈神事は、旧暦正月元旦未明(旧暦では大晦日の深夜)に行われる秘事である。関門海峡では旧暦正月1日午前3時頃が1年最大の干潮で、ワカメを刈りやすいことが大きい。秘事の理由は、神功皇后の出産と関係し、和布刈に新生命誕生の意味付けをしたのかも知れない。前年・今年・来年は、前世・今世・来世に繋がり、深夜未明がその接点であった。これは朝鮮半島では祖先の霊を迎えて祀る祭事(チェサ)が未明行われたり、古代朝鮮百濟系とされる天皇の即位や葬式が夜行われる事とも共通である。また、新羅に勝って軍神となった神功皇后には後世、戦勝祈願の意味を込めたのかも知れない。

ワカメは、カルシウム分が多く栄養価に富み、朝鮮(韓国)では古来、妊娠・授乳時にワカメスープ(ミヨックッ)を食べる。海藻の中で特にワカメが選ばれたのは、神功皇后が丁度、妊娠・出産・授乳期だったからで、朝鮮との共通性が感じられる。

関門海峡は古来交通の要所で、和布刈神社西南数kmの厳流島から門司港との間には朝鮮の船が着き、港が栄えた。樟葉(くずは、葛葉、百濟)、白木崎(新羅崎。最近、風師に変更)、小森江(こもりえ、高麗入江)等の地名が残り(図7)、住吉神社周辺(新下関駅近く)同様、朝鮮系の子孫が多いという(和布刈神社宮司・高瀬家信氏私信)。

まとめ

和布刈神事は、山陰地方から北九州にかけて、現在少なくとも三つの神社で行われている。いずれも1600年以上続く神事で、出雲日御崎神社では旧暦正月5日の昼、下関市の住吉神社と北九州市門司区の和布刈神社では、旧暦正月1日未明にワカメを刈って神前に備え、その年の豊漁、航海安全、無病息災などを祈り、ワカメ刈りの解禁日としている。

謝辞

和布刈神事の取材に関して、日御崎神社の小野高慶宮司、高木玄明禰宜、住吉神社の大司満邦宮司、小山久志禰宜、和布刈神社の高瀬家信宮司、高瀬泰信禰宜と多くの神職・氏子の皆さんに大変御世話になった。関係者に深く感謝したい。特に住吉神社では1600年の歴史中唯一の例外として特別和布刈供奉員(ぐぶいん)として参加させて頂けた。厚くお礼の言葉を述べたい。

引用文献

- 秋本吉郎(校注)1958. 風土記(733). 出雲國風土記, pp. 198-199. 日本古典文学大系, 岩波書店.
小泉八雲1891. 日本警見記上, 第12章日ノ御崎. (恒文社, 1975).
高木玄明1991. 和布刈神事. pp. 152-154. 島根県祭礼研究会編, 倉林正次監修, 都道府県別祭礼事典・島根県, 桜楓社.